「キリストの支配下に移されて」（コロサイ一・九～一四）

1　聖徒の日

今日は、日本基督教団の行事日の一つ、「聖徒（せいと）の日」です。召された信徒、教職の記念礼拝です。

一一月の最初の主日に、こうした礼拝をおこなうことは、キリスト教の長い伝統に沿ったことです。

亡くなった方を記念する、思い起こし、感謝し、関係の方々にあらためて慰めを祈る、こうしたことは、もちろん洋の東西を問いませんし、何かしらの宗教に属しているか、いないか、ということにも関わりないことだろうと思います。人としてのいわば根源的な営みの一つに数えられるものです。

キリスト教では、昔から、そのために一一月一日が当てられていました。なぜ一一月一日かということは、はっきりは分かりませんが、先日ソウルで痛ましい事故のあったハロウィンとも関係があります。ハロウィンはキリスト教以前の（あるいは無関係の）異教の祭り（一〇月三一日。ケルト文化に由来）から来ています。そうした習慣も取り込んで、この時期、亡くなった方を記念することを、キリスト教はしてきたのです。

ハロウィンは、テレビなんかで見ると、骸骨の衣装を着たり、カボチャのお化けのようなものをもったり、かぶったり、要するに、死者が家々に戻ってくる、というような祭りです。

それはそれで、もちろんそこには大切なことがあるようにも思いますが、しかしキリスト教は、亡くなった人について、そのようには考えていません。テサロニケの信徒への手紙のよく知られた言葉を思い起こしたいと思います。

> 兄弟たち、すでに眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人びとのように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます（テサロニケ一、四・一三～一四）。

このテサロニケの信徒への手紙は、使徒パウロの手紙です。パウロはここで「イエスを信じて眠りについた人」の将来について、イエスと一緒に「導き出して」くださいますと言っています。「導き出す」とは、死人の中から「導き出す」、すなわち復活のことです。

復活のかたち、その有様については、私ども、聖書が伝えているイエスの甦りに示されていること以上は分かりません。しかし復活という事実、この根底には、神がイエスを、その生き死に、すべてを受け入れてくださったということがあります。神の肯定、

神の然り（しかり）です。
その上で重要なことは、こうして御子イエスが神によって受け入れられたことには、私どもが、したがってこの私が、神によって受け入れられたということも含まれているということです。
御子イエスによって開かれた、神との私どものこうした関係も、神が永遠（とこしえ）であるゆえに、永遠に変わることはない。それがキリスト者の希望であり、いまを生きる力なのです。

2　永遠の命

さて今日の聖徒の日、永眠者記念礼拝に与えられた神の言葉は、コロサイの信徒への手紙第一章です。
この手紙の著者は、諸説がありますが、手紙のはじまりのところに、「パウロと兄弟テモテから」（一節）とあるので、まずは、使徒パウロと考えておいていいと思います。
パウロの獄中からの手紙の一つです（四・三）。捕らえられているのは、パウロだけではありません（四・一〇）。
しかしエパフラス（一・七）といった人物をはじめとして、囚われていない何人もの協力者がいました（四・七以下）。コロサイ書を読むと、何よりそうした人が大勢いたことに感銘を受けるものです。
そうした人たちによって、コロサイ教会の様子が、獄中のパウロらに、伝えられます。それによると、コロサイの信徒たちは、様々な間違った教えを説く教師にまどわされながらも（二・四、八、一六以下）、なお、福音信仰にしっかり立っていたのです。パウロはこのことを聞き（一・三以下）、感謝のうちに書き記したのが今日の箇所です。一二節まで、もう一度読んでみましょう。

こういうわけで、そのことを聞いたときから、わたしたちは、絶えずあなたがたのために祈り、願っています。どうか、霊によるあらゆる知恵と理解によって、神の御心を十分悟り、すべての点で主に喜ばれるように主に従って歩み、あらゆる善い業を行って実を結び、神をますます深く知るように。そして、神の栄光の力に従い、あらゆる力によって強められ、どんなことも根気強く耐え忍ぶように。喜びをもって、光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたがたがあずかれるようにしてくださった御父に感謝するように（九～一二節）。

一つ一つの言葉は、とくに難しくはないのですが、全体は少しつかみにくいかも知れません。少し整理して、内容を考えて見ます。
何よりもパウロ自身、先ほど申し上げたように、コロサイ教会の様子を聞いて、なおコロサイの信徒のために祈っていると書いています。私たちはあなたたちのための祈りをやめたことがないと。

祈りの内容は、「どうか」以下に示されています。神への祈り、コロサイの信徒のための執り成しの祈りです。

内容を整理していえば、パウロは、コロサイの人たちが、一つは、神の御心を十分に悟ることができるようにと祈っています。さらに、主に従い、善き業に生きることができるようにと祈っています。三つ目ですが、この世にあって彼らが忍耐強くあるようにと祈っています。そして最後に、将来の救いを疑うことなく感謝をもって歩むようにということです。

いま最後に言った、〈将来の救いを疑うことなく〉ということは、とくに今日の聖徒の日、注意を向けていいところです。一二節です。「光の中にある聖なる者たちの相続分に、あなたがたがあずかれるようにしてくださった御父に感謝するように」とありました。その意味は、コロサイの信徒たちが、将来、聖徒としてあずかる分、分け前、別の言葉で言えば、〈永遠の命〉といったらよいでしょうか、それをいただく資格を神から与えられている、それを父なる神に感謝するようにと、パウロは祈っているのです。

ふだん私どもは、いまを生きることで精一杯で、信仰を、現在の生活を超えたことと関係づけて考える余裕はあまりありません。しかし今日のような日には、信仰を、私ども自身の将来と深く関わることとしても考えてみるべきです。詩編に次のような言葉があります。

われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させてください（詩篇九〇・一二、口語訳）。

意味は、こうです。私どもの人生の時間は限られています。しかも、それは、自分で、いかようにでもできる時間でもありません。「わたしの時はあなたのみ手にあります」（詩篇三一・一五、口語訳）。

なるほど私どもの人生は限られています。しかしそれは、神から貸し与えられた時間です。それを私どもどのように生きるか、何のために生きるのか、もちろん、一人一人に委ねられています。

聖書は、人の生きる目標を示しています。神の栄光のために、です。抽象的かも知れません。それを具体化するのは、私どもの仕事です。音楽家のバッハが、その作品の最後に、いつも〈ただ神の栄光のために〉と記したことはよく知られています。どのように自分の人生を神の栄光のために生かし用いるのか、そのとき、私どもには真実の知恵が必要となるのです。

3　キリストの支配下に移されて

今日、永眠者記念礼拝、毎年、こうして神に召された方々の写真をかかげて、いわば二階に住まいを移された天上会員と、地上会員と、目に見える仕方で共に礼拝を献げています。

今年は、昨年の聖徒の日から数えて、九人の方々、兄弟姉妹を天上会員としてお送りすることになりました。週報にお名前が出ているので、ここで読み上げることは致しませんが、四四歳の黒田さんから、百歳の酒井髙男さんまでの九人です。教会の逝去者名簿は一七九人になりました。

今年の『角笛』が出たので、昨日、早速読ませていただきました。一四編に及ぶ追悼文はみな真実がこもっていて、亡くなった方を改めて思い起こし、それぞれに神に貸し与えられた人生の時間を、信仰において誠実に生き切って召されたことを思ったことでした。この方々もみな、聖徒に約束された分け前、永遠の命をいただいているものと確信しています。

さて今日の聖書で、まだ触れていない箇所があります。それを最後に取り上げたいと思います。

御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです（一三～一四節）。

先ほど、一二節の聖句によって、父なる神は、聖徒に対して彼らが受けつぐ分として、永遠の命を用意しておられる、約束しておられるということを、私ども聞いたわけです。

しかしこのことは、まさに御子イエス、イエス・キリストによって、キリストの十字架の死と復活によってのみ開かれた道であることを、パウロはここで改めて明確にしています。

パウロはここで二つの方面から、十字架の出来事を説明しています。十字架において闇と死の「力」がイエスを襲います。イエスは死んで、闇がまるで勝利したかに見えます。しかしそうでしょうか。イエスの甦り、それは、イエスが闇と死の力に勝利したことを明らかにしたのです。この勝利は、ひとり御子のためだけなされたのではありません。この勝利は私どものためでもあります。私どもは、勝利者キリストの支配のもとに移し置かれたのです。

もう一つ、十字架は、罪の贖い、赦しを意味すると、パウロは説明しています。人は罪人として、そのままでは、死と滅びを免れない。しかしイエスが、私どもに代わって罪の罰としての死を引き受けられたことによって、人に、赦しが与えられたのです。人間は御子の命という代価を払って贖われたのです。

今日の聖徒の日、私どもが覚えている一七九人の信仰の先達、とくにこの一年の間に亡くなられた九人の兄弟姉妹、この方々もみな、キリストの恵みの支配下に移し置かれて召されたのです。

信仰によって、私どもも、いますでに、この世にあって、キリストの支配下に移し置かれた者たちです。私どもを脅かすものが、なお多くあります。私どもは弱い存在です。しかし〈移し置かれた〉という事実は、決して逆転されない。その神のご支配の恵みに私どもみな固く立って歩みたいのです。

（一一月六日、聖徒の日）